

平城京東市跡推定地の調査 IV

第6次発掘調査概報

奈良市
教育委員会

昭和61年

奈良市教育委員会

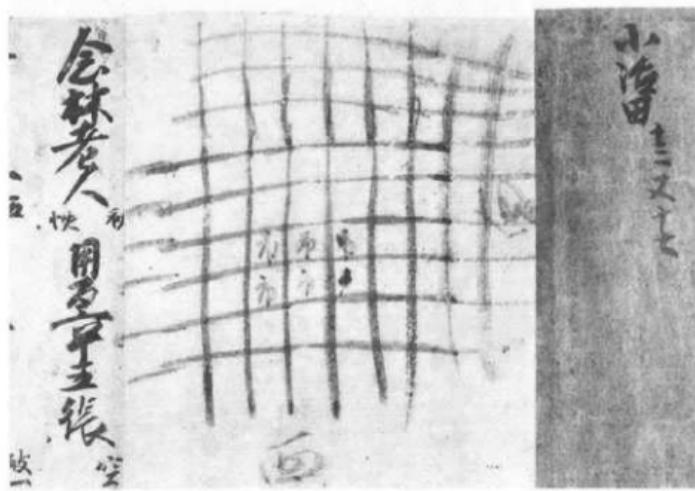


fig. 1 平城京市指圖（京都知恩院所藏「写經所紙筆授受日記」紙背）



fig. 2 発掘区全景（西から）

序 文

奈良市が長い歴史をもち文化遺産に恵まれた世界有数の都市であることはいうまでもありません。なかでも「咲く花の匂うがごとく」とうたわれた平城京は、奈良時代のわが国の首都であり、その歴史的価値にははかりしれないものがあります。平城京をはじめこうした文化遺産を保全し、さらに次の世代へと引継いでゆくことが、現代に生きる私達に課せられた大きな責務であります。

しかしながら、昨今の急速な都市開発を目のあたりにすると、平城京の保全にしても、開発に対処しての事前の緊急調査だけでは不充分であります。とりわけ重要な地点については今後の都市計画とも整合した保全策を考えるべく、積極的に計画的な調査を実施する必要がありましょう。奈良市ではこうした考えのもとに、昭和56年以来、平城京の経済活動の中心地であった東市の計画調査を進めてまいりました。本年度がちょうど5年目になりますが、今回は市域推定地の中心部分を発掘し、貴重な成果を挙げております。

開発にともなう調査とは違って、水田を借り上げて調査し、終了後はもとの状態に戻してお返しする調査ですから、土地の所有者ははじめ地元の方々には多大な御理解と御協力をいただいております。また、調査にあたっては、奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会の先生方にいろいろと御指導いただきました。あつく御礼申し上げます。

昭和61年 3月

奈良市教育委員会教育長職務代理者

教育総務部長 松 本 和 義

例　　言

1. 本書は、昭和60年度に奈良市東九条町において実施した、平城京東市跡推定地内（左京八条三坊十一坪）の発掘調査の概要報告である。
1. 調査次数、調査期間および調査地番は下記のとおりである。

60年度 第6次調査 昭和60年11月19日～昭和61年3月19日（東九条町437番地）
438番地）
1. 調査は、奈良市教育委員会社会教育部文化課（課長・亀井伸雄）が実施し、中井 公が担当した。なお、補助員として金村浩一、影近栄子（奈良大学2回生）、古川成美（関西大学2回生）、大西明彦（京都産業大学1回生）の諸君が参加した。
1. 調査にあたっては、地元自治会および筑瀬改美氏（東九条町367番地）から、調査地の提供をはじめ数々の便宜を受けた。記して感謝したい。
1. 本書の作成および挿図の掲載にあたっては、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部、京都知恩院より協力を受けた。記して謝意を表したい。
1. 本書の執筆は下記のとおり分担して行ない、中井 公がこれをとりまとめた。

I・II・III-1・IV; 中井 公、III-2; 森下恵介、III-3; 篠原豊一

目　　次

I はじめ	1
II 検出遺構の概要	4
1. 奈良時代～平安時代初期の遺構	4
2. 鎌倉時代の遺構	8
III 出土遺物の概要	18
1. 瓦類	18
2. 土器類	19
3. 木製品	24
IV まとめ	25



調査地 昭和56年度に開始した平城京東市跡推定地の継続調査も5年目になる。過去第1次から5次までの調査は市域推定地の北辺あるいは東辺で実施し、縁辺部分の様相解明を主たる目的としてきたが、今回の調査ではじめて本格的に内部を発掘する機会を得た。調査地は推定地内のほぼ中央で、坪割の上からは左京八条三坊の五、六、十一、十二坪を画す条坊の交差部に相当する箇所と十一坪内の南西隅とにまたがるところである。

東市を上述の四町域に比定する考え方、文献研究の側面ではほぼ定説化した感がある。反面発掘遺構や出土遺物の側面からその存在を裏付けることは至難のことである。過去の調査がこのことを如実に示している。それゆえに発掘に際してより調査効果が期待されるところを選択することは当然で、四方に聞くであろう市門の推定地や東堀河とその沿辺部などは、ぜひとも発掘すべきところではあろう。しかしながら、現実に耕作が継続されている水田や畠地を借上げて実施する調査の性格上、発掘場所やその範囲に制約があるのは当然のことである。ちょうど5年目の節目の時期に市域の中央部を調査できることは大きな収穫であったといえよう。

調査の概要 調査は南北二筆にわたる水田に、畦畔をはさんで合計約600m²の発掘区を設定して実施した。調査期間は、昭和60年11月19日から翌61年3月19日までである。

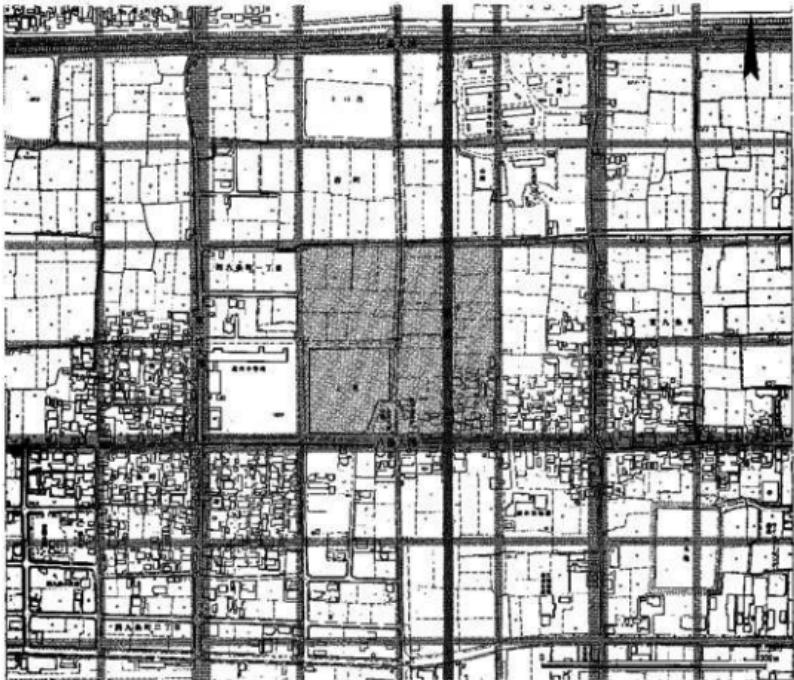


fig. 4 市域指定地周辺の地形と条坊 1/7500 (奈良市1978年作製1/2500「大和都市計画図No.25」使用)

その結果、東西の道路と南北の道路とが交差した状態を明らかにし得たが、これらが通常の条坊であるのか、あるいは市の内部を区画する通路であるのかの識別は難しく、課題を残した。一方、一坪内部では建物や井戸が高い密度で重複している事が判明した。大半は奈良時代から平安時代初期にかけて相次いで構築され、4回以上の変遷がみとれる。建物は 2×3 間程度の小規模なものばかりで、井戸には種々の形式のものがある。また、道路側溝や井戸からは土器、瓦、木製品などが出土したが、これら遺物の中にも端的に市の存在を裏付けてくれるようなものは見出せなかった。

ところで、これら平城京期の遺構と重複して鎌倉時代の建物や井戸も検出したが、これも見逃せない事実である。平城京東市が廃都後も「辰市」と称される市に継承され賑わったことは、枕草子を初見として平安時代後期から鎌倉時代にかけて広く和歌の題材に取上げられたことなどからもうかがい知れるが、こうした時期の遺構が発見されたことは、今後この地域を解明してゆく上で貴重な資料を得たことになる。

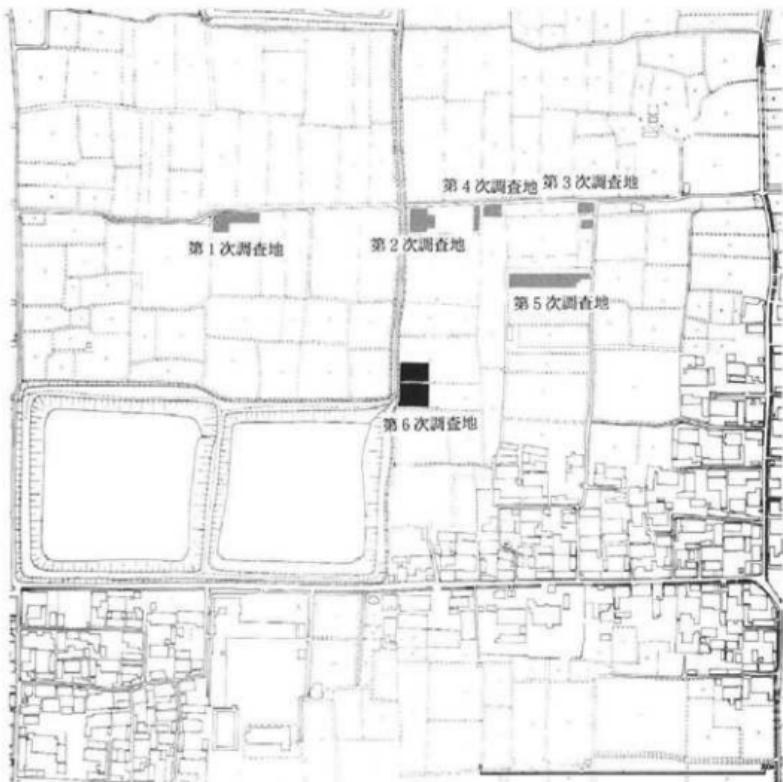


fig. 5 発掘区位置図 1/4000 (奈良国立文化財研究所1963年作製 1/1000「東市」使用)

第6次調査日誌抄

- 60年11月19日 収設現場事務所の設営および発掘機材などの搬入。
 11月25日 発掘場所 (600 m²) 設定。耕土、床土の排除を開始。
 11月28日 奈良市発掘調査測量用基準点により国土方眼標を設定。併せて発掘区内の地区割を設定する。
 11月30日 床土の除去完了。以下の埋蔵土の排除に移る。
 12月20日 地植土除去を完了。遺構検出は年明けてからとし、年内の調査は本日で打ち切る。
- 61年1月7日 調査再開。遺構検出を開始する。1月13日までに次第に道路遺構の存在が判明する。
- 1月14日 遺物遺構の検出を開始。凍結で作業ははかどらず。
 1月27日 破壊遺構の検出に一段落がつき、井戸の掘下げ開始。
 2月5日 井戸を中心とした1回目の地上写真撮影を実施する。
 2月7日 地上全般、道路遺構など第2回目の地上写真撮影。
 2月8日 桁下写真測量の後、建物中心に第3回目の写真撮影。
 2月10日 実測用通り方を設定し、補足の実測作業にはかる。
 2月18日 記者発表。雨天のため宿内(理文センター)で実施。
 2月19日 地元住民と関係者に調査成果を説明。参加50人余。
 2月20日 砂入れ養生の後、埋戻しにかかる。3月19日完了。



fig. 6 説明会風景

II 検出遺構の概要

発掘区内の基本的な土層は、水田耕作土と床土の下、灰褐色砂土、茶褐色土、茶灰色砂土の堆積が続き、地表下約0.5~0.7mで黄褐色粘土の地山となる。遺構を検出したのはこの地山上面においてであり、主要なものは道路、素掘り溝、掘立柱建物、井戸、土壙などである。構築の年代は奈良時代から平安時代初期までのものが大半を占めるが、鎌倉時代にまで下るものもある。

1. 奈良時代～平安時代初期の遺構

この時期の遺構には、道路1条、素掘り溝4条、掘立柱建物11棟、井戸4基があり、少なくとも4時期以上の変遷がある。

道路SF022 東西方向の道路で、左京八条三坊の十一坪と十二坪とを画す。南北両側溝を有し、路面幅は当初4.0~4.2mであったものが、後に南側溝が掘替えられて南へ0.9~1.2m拡幅されている。路面上での舗装などの有無は確認できず、検出面は地山上面である。ただ、路面は十一坪内部の遺構面に比して一段低く、0.15~0.2mの比高差がある。あるいは路面のみ地山を削り込むような造作がなされたのかとも考えられる。

溝SD019 SF022の北側溝、幅1.0~1.8m、深さ0.2~0.4mの素掘り溝である。溝内には上層に灰褐色砂土、下層に茶灰色砂土が堆積し、奈良時代末の土器、瓦が出土した。溝の西端は北に折曲って南北溝SD023に続く。

溝SD020 SF022の当初の南側溝。幅0.9~1.2m、深さ0.15~0.25mの素掘り溝で、北側溝との間隔は溝心々で約5.3mである。溝内には上層に茶灰色土、下層に灰褐色砂土が堆積する。奈良時代の土器が出土したが、破片が僅少あるだけで詳細な廃絶時期などは決し難い。

溝SD021 SD020廃絶後その南側に新たに掘削されたSF022の南側溝。幅0.8~1.3m、深さ0.15~0.25mの素掘り溝で、北側溝との間隔は溝心々で約6.8mとなる。溝内には上層に灰褐色土、下層に灰褐色砂と灰色砂土が堆積し、奈良時代末の土器、瓦が出土した。

溝SD023 SD019の西側から北に折曲がる南北方向の素掘り溝で、六坪と十一坪とを画す。

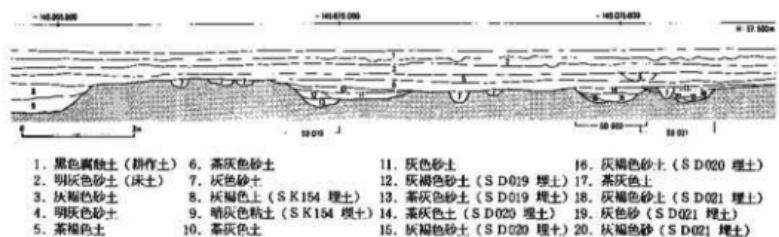


fig. 7 発掘区東駄土層図 1/100

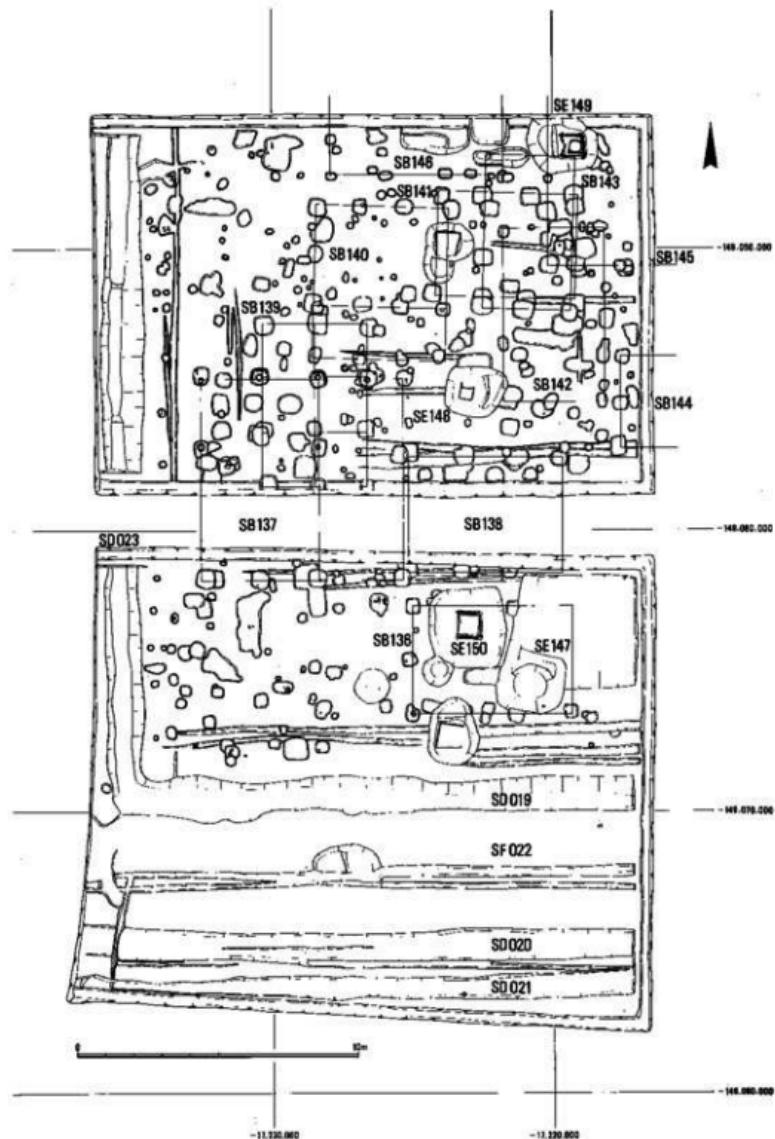


fig. 8 檜出造構平面図(奈良時代～平安時代初期) 1/200

- 建物模式図凡例
 ● 柱痕跡を確認
 ○ 圆形のみ確認
 ○ 推定
 (図の上が北)



SB136



SB137



SB138



SB139



SB140



SB141



SB142



SB143

道路の東側溝にならう。幅1.1~1.6m、深さ0.15~0.3mで部分的に0.6mほどまで深まる部分がある。溝内埋土はSD019と同じ様相で、出土土器も奈良時代末のものが占める。このことから、SD019、021、023の3条の溝の廃絶時期はほぼ同時であったと推察できる。

建物SB136 桁行3間(5.7m)、梁行2間(3.8m)の東西棟建物。SE150、SK154の掘削で3柱穴を火くが、柱間は桁行、梁行ともに1.9m等間に復原できる。また、SE147、152も本建物の柱穴を切っており、これらよりも古いことがわかる。

建物SB137 桁行推定3間(7.2m)、梁間3間(7.2m)の東廂付南北棟建物。柱間は桁行が推定2.4m等間、身舎梁行が2.1m等間で、廊の出は3.0mである。柱穴の重複関係からSB138、139よりも新しいことがわかる。

建物SB138 桁行3間(5.6m)、梁行推定2間(4.2m)の東西棟建物。柱間は桁行が東から1.8~1.9~1.9mで、梁行は両妻柱が未検出ではあるが、2.1m等間となろう。重複関係からSB137、SK154よりも古い。

建物SB139 桁行3間(5.7m)、梁行2間(3.6m)の総柱の南北棟建物。柱間は桁行が1.9m等間、梁行が1.8m等間である。柱穴の重複関係からSB137よりも古いことがわかる。

建物SB140 桁行3間(4.8m)、梁行3間(5.4m)の南廂付東西棟建物。柱間は桁行1.6m等間、身舎梁行1.8m等間で、廊の出も1.8mである。重複関係からSB141よりも新しく、SE153よりも古いことがわかる。なお、建物方位が北で東に振れている。

建物SB141 桁行3間(5.1m)、梁行2間(3.6m)の東西棟建物。柱間は桁行が1.7m等間、梁行が1.8m等間である。重複関係からはSB140、143、SE153よりも古いことがわかる。なお、SB140と同様に建物方位が北で東に振れている。

建物SB142 桁行3間(6.0m)、梁行2間(3.6m)の南北棟建物。柱間は桁行が2.0m等間、梁行が1.8m等間である。重複関係からSE148よりも古いことがわかる。

建物SB143 桁行3間(5.4m)、梁行2間(3.2m)の南北棟建物。柱間は桁行が1.8m等間、梁行が1.6m等間である。重複関係からSB141よりも新しく、SE149よりも古いことがわかる。SB140、141と同じく建物方位が北で東に振れている。なお、本建物について桁行がさらに発掘区外北へのびるとみることも可能だが、ここでは上述の規模と考えておく。

建物SB144 南北2間(3.2m)の柱列で、東西棟建物の西妻柱列と考えられる。柱間は1.6m等間である。

建物SB145 建物の南西隅にあたる3柱穴を検出したが、その配置から南北棟建物であると考える。柱間は桁行1.8m、梁行2.7mである。

建物SB146 桁行3間(6.3m)、梁行1間(1.4m)以上の東西棟建物。桁行柱間は2.1m等間である。

井戸SE147 東西2.4m、南北2.2mの隅丸方形掘形をもつ井戸で、深さ1.5m。掘形は0.9m掘下げたところで北辺に段をつけて二段掘りしている。井戸枠は抜取られて残存しない。奈良時代中頃の土器がわずかに出土した。重複関係からSB136よりは新しくSK154よりも古いことがわかる。

井戸SE148 東西2.2m、南北1.8mの隅丸方形掘形をもつ井戸で、深さ2.4m。掘形は0.8m掘下げて東辺に段をつけて二段掘りし、中に堅板組の方形井戸枠を据えている。井戸枠は各辺一枚の堅板を横桟で支持するだけの簡単な構造のもので、横桟は2段分を確認したが、最下段のみ現位置をとどめ残りは転落していた。横桟は双方の仕口を45度にし、木口を表面にみせない包納式で組まれている。堅板は残存長170cm、幅65~75cmで、組んだ内法は一辺65cmである。枠内からは奈良時代中頃の土器、曲物などの木製品が出土した。重複関係からSB142よりは新しいことがわかる。

井戸SE149 掘形北辺が一部未検出だが、南北2.0m以上、東西2.5mの隅丸方形掘形をもつ井戸で、深さ2.2m。掘形は0.8m掘下げたところで西辺に段をつけて二段掘りし、中に堅板組の方形井戸枠を据えている。堅板は隅柱を用いずに目達納で組んだ横桟で支持される構造だが、最下段のみ井籠組の板材で支えている。横桟と南辺堅板は崩壊して落込んでいた。井籠組板材は長さ72~78cm、幅25~35cm、厚さ5cmで、目達納で組まれた内法は一辺65cm。堅板は幅25~35cmのものが各辺に5~6枚使

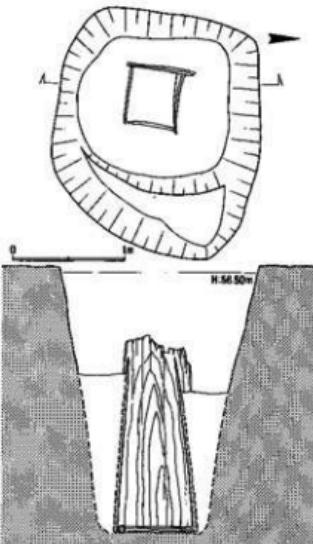


fig. 9 井戸SE148平面・立面図 1/50

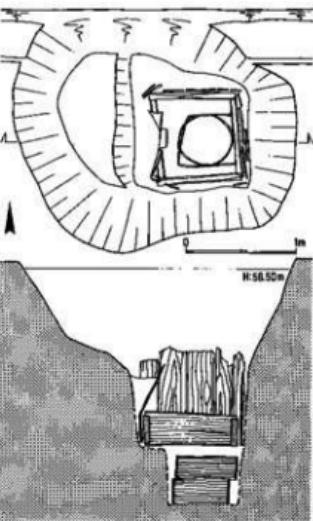


fig. 10 井戸SE149平面・立面図 1/50

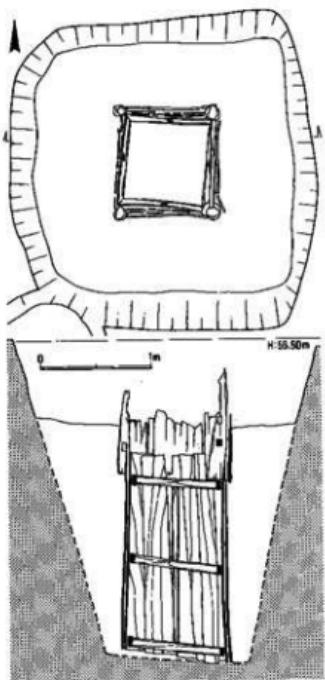


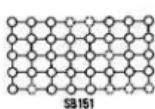
fig. 11 井戸SE150平面・立面図 1/50

用され、内法一辺75cmである。さらに井戸底には水溜の曲物2個を据えている。上の曲物は長辺60cm、短辺45cmの隅丸長方形で、高さ18cm。下の曲物は径50cmの円形で、高さ22cmである。枠内からは奈良時代後半の土器をはじめ、土馬、曲物などが出土した。重複関係からSB143、145よりは新しいことがわかる。

井戸SE150 東西2.7m、南北2.8mの隅丸長方形掘形をもつ井戸で、深さ2.8m。井戸枠は方形堅板組のものを上下2段に重ねた構造である。下段は脚柱を用いず横桟3段で堅板を受けている。横桟の仕口は双方45度に切られ、包込納を用いて組まれ、さらに横桟の上下は納受けの支柱で支えられる。板材は長さ170~185cm、幅15~30cmのものが各辺10枚ほど二重にあてられ内法は一辺82cmである。上段は四隅に立てた円柱に納留めした横桟で堅板を受けており、最下段の横桟のみ残存する。堅板は各辺とも20~60cmの幅広の材が一重に2~3枚使用されていて、内法一辺90cmである。枠内からは9世紀中頃の土器、土馬、高串・横樋・曲物などの木製品が出土した。重複関係からはSB136よりは新しいことがわかる。

2. 鎌倉時代の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物1棟、井戸2基、土壤などがある。



建物SB151 桁行7間(15.2m)、梁行4間(7.4m)の総柱の東西棟建物。柱間は桁行が2.1~2.3m、梁行が1.8~2.0mで不揃いである。柱掘形は一辺0.2~0.3mと小さく、深さも0.1m前後と浅く残存しないものもある。

建物方位が北で東に振れている。

井戸SE152 一辺1.8mの隅丸長方形掘形をもつ井戸で、深さ0.8m。井戸枠は北側の抜取塙から抜けられ、底部に内法一辺85cmの目遣納組の角材のみが残存する。13世紀中頃の土器が出土した。

井戸SE153 東西1.7m、南北1.4mの楕円形掘形をもつ井戸で、深さ0.85m。井戸枠は南側の抜取塙から抜けられ、底部に内法一辺85cmの相欠き納組の角材のみが残存する。13世紀中頃の土器が出土した。

土壤SK154 東西4.9m以上、南北4.2m以上、深さ0.55mの土壤。13世紀中頃の土器が出土。

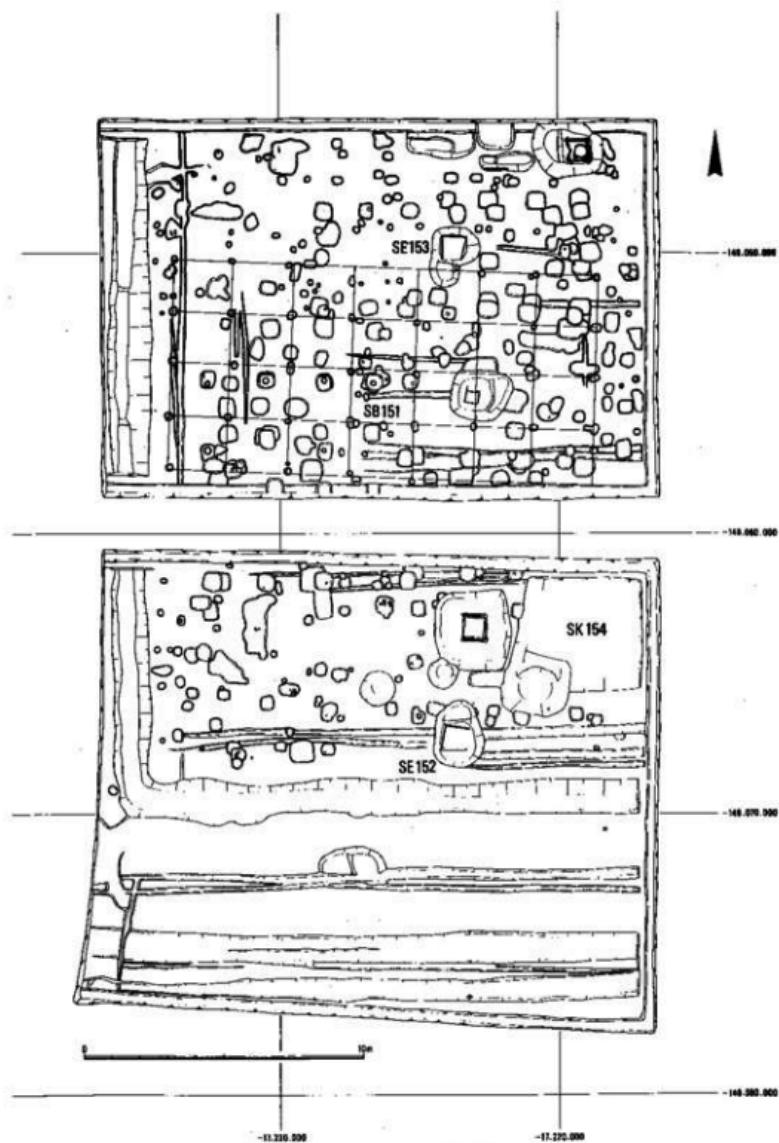


fig.12 條出造構平面図(鎌倉時代) L/200

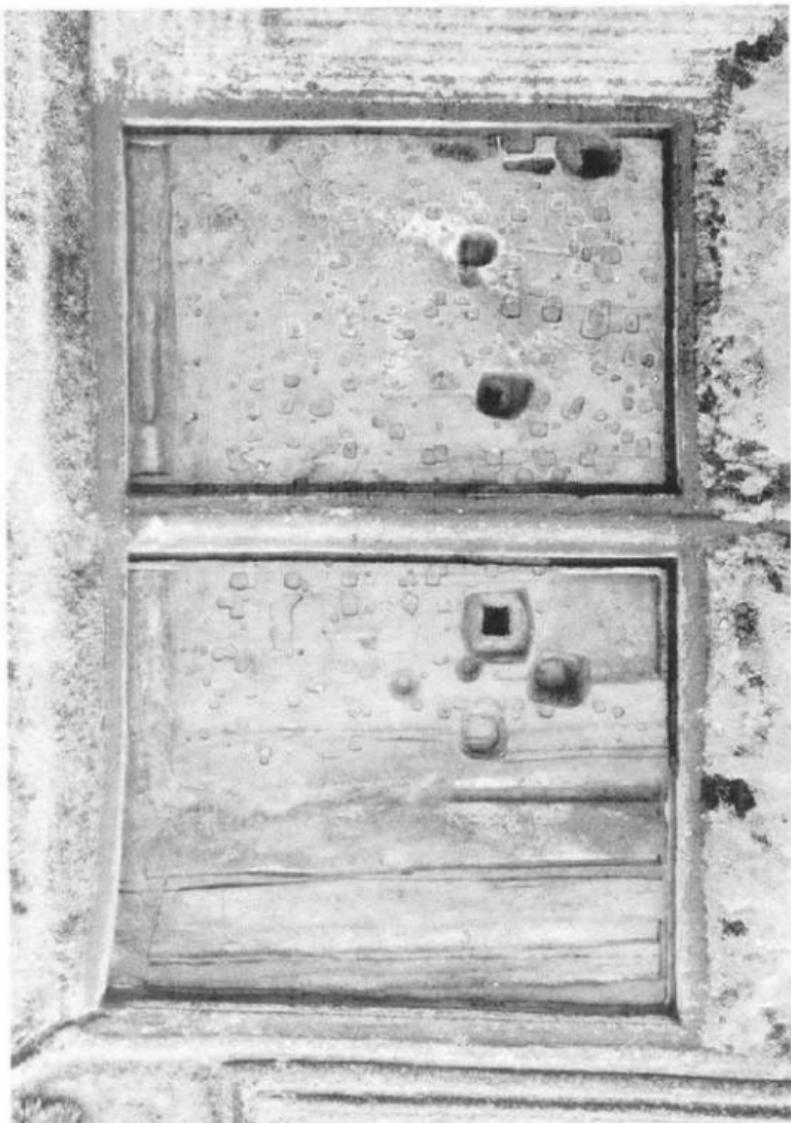


fig. 13 航空写真 1/200

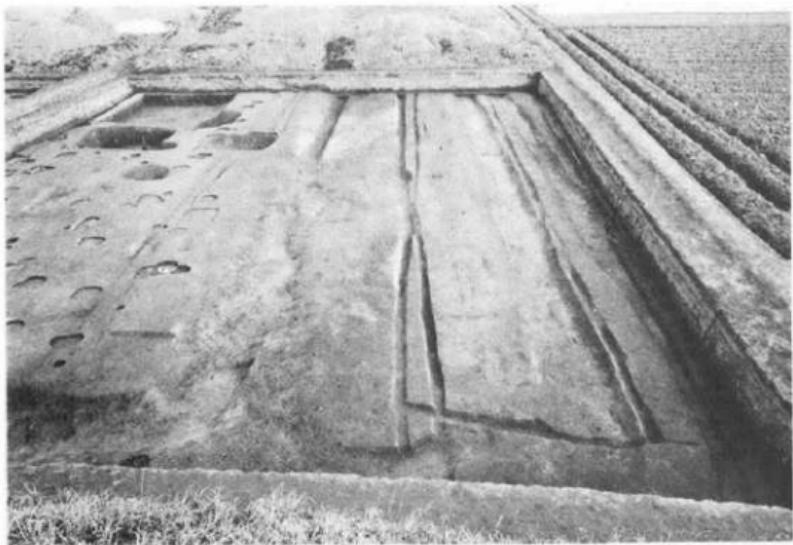


fig.14 道路SF022、溝SD019・020・021（西から）



fig.15 溝SD023（南から）



fig.16 発掘区南半部（東から）



fig.17 発掘区南半部（西から）

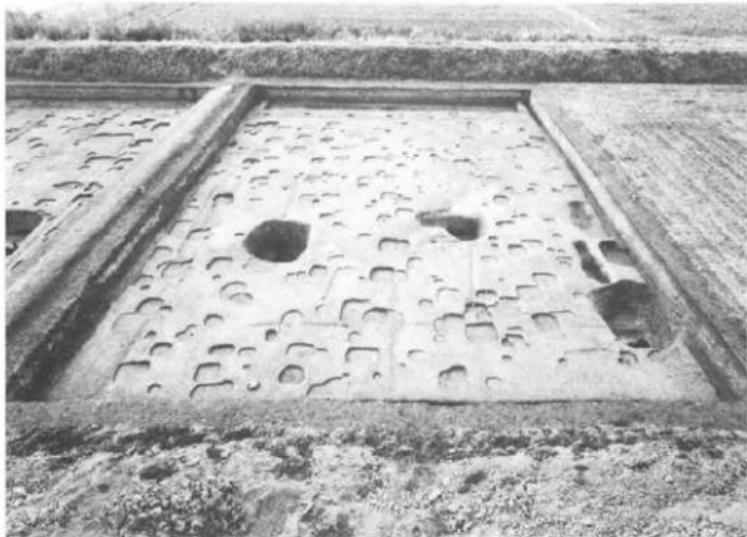


fig.18 発掘区北半部（東から）



fig.19 発掘区北半部（西から）



fig.20 建物SB136（西から）



fig.21 建物SB137（北から）



fig.22 建物SB139（北から）



fig.23 建物SB140（西から）



fig.24 建物SB141（西から）



fig.25 建物SB143（南から）



fig.26 井戸SE147・150
* 152 (北から)



fig.27 井戸SE150 (西から)



fig.28 井戸SE148 (東から)



fig.29 井戸SE149（南から）



fig.30 井戸SE152（東から）



fig.31 井戸SE151（西から）

III 出土遺物の概要

1. 瓦類

瓦類は整理箱10箱分があるだけで、極めて小量である。大半は遺物包含層から出土したが、道路側溝、井戸、土壤などからも若干量の出土があった。種別は通常の丸瓦・平瓦がほとんどで、軒瓦は軒丸瓦1点と軒平瓦2点とがある。また、施釉平瓦3点が含まれることが注目される。

軒丸瓦(1) 外区の小片で、内縁に珠文、外縁に線鋸彫文がめぐるが、内外縁を両す圓線のないのが特徴である。わずかに弁端の一部が残り、主文が蓮華文であることだけは確認できる。平城宮・京城を通じこれまでに同範例の出土は知られていない。遺物包含層出土。

軒平瓦(2・3) 2は重弧文軒平瓦。額部が剥離した平瓦部に弧文2条が残るが、四重弧文であろう。凹面には粘土板の合わせ目線がみられ、凸面の額部剥離面には格子叩き目が残る。姫寺の所用瓦であろう。SD023出土。3はいわゆる東大寺式の均整唐草文軒平瓦。対葉花文の中心飾りの左右に3回反転する均整唐草文を配し、外区には珠文がめぐる。各単位とも主葉および4条の第1支葉と1条の第2支葉とで構成されるが、主葉のみが大きく巻込む。また、珠文数が上外区10個であるのに対し下外区9個と異なる点でも特徴的である。平城宮6732L型式軒平瓦と同様で、宮内のほか秋篠寺に同范例がある。SD019出土。

施釉平瓦(4・5) 4・5ともに狭端隅を残す破片で、凹面と端面に施釉がある。凹面は三彩で、綠釉を基調に白釉と褐釉とを鹿の子斑状に塗りわけているが、側縁から2.5cm幅ほどの範囲には施釉しない。厚さ1.5~1.6cmで、凸面には緑釉の網叩き目が残り、凹面では施釉範囲の布目を丁寧にナデ消している。胎土は精良で、焼成は甘く、淡黄白色を呈する。4は遺物包含層出土。5は柱穴(施釉としてまとまらず)出土。なお、図示した以外にも側縁の小片1点がある。綠釉と白釉とがわずかに残存するのみだが、同じく三彩釉のものであろう。SD019出土。

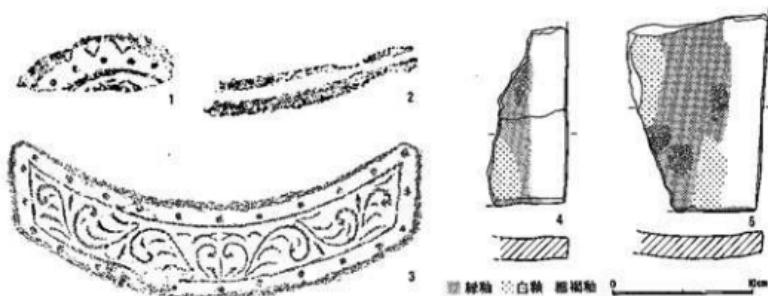


fig. 32 軒瓦・施釉平瓦 1/4

2. 土器類

土器類は、造構面を覆う茶灰色砂土、素堀り溝、井戸、土壤、建物の柱穴などから出土したが、なかでも比較的まとまった土器が出土したのは、道路側溝SD019・021・023、井戸SE148・149・150・152・153、土壠SK154などである。

SD023出土土器 (fig.33) 土師器には、皿A (1~5)、楕A (6)、鉢B (7) がある。残存状態が悪く調整方法等を観察できるものは少ないが、1はc手法、ほかの皿もbあるいはc手法とみられる。また、鉢Bの口縁部外面上部にはヘラミガキを施している。須恵器には、杯B蓋 (8~10)、杯B (11~14)、壺M (15)、高杯 (16) がある。

SD019出土土器 (fig.33) 土師器には、杯A (17)、皿A (19~22)、鉢B (18)、壺A (31・32)、小型模造瓶 (26)、須恵器には、圓脚円面硯 (23)、小型皿 (25)、壺M (24)、杯B蓋 (27・28)、蓋X (29)、杯B (30) がある。土師器皿Aは、SD023出土のものと同じく、外面をヘラケズリするb・c手法のものが多い。なお、SD019からは須恵器杯Bの底部外面に墨書のあるものが1点出土しているが、判読できない。

SD021出土土器 (fig.33) 土師器皿A (33)、須恵器杯B (34)、杯L (35)、須恵器杯B蓋 (36~38) が出土している。

SE148出土土器 (fig.34) 土師器には、杯A (39・40)、皿A (41~44)、楕C (45)、杯B蓋 (46)、小楕 (51)、壺B (50)、壺A (49)、高杯A (55) があり、須恵器には、杯B蓋 (47・48)、杯B (52)、楕B (53)、杯A (54) がある。39~41・43・49・53・54が掘形埋土上層から出土したもので、ほかは杯内の堆積土から出土したものである。41の内面には螺旋暗文・放射暗文が施される。土師器の杯・皿類は表面の残存状態が悪く調整手法等の觀察は困難であるが、44は外面をヘラミガキしていることがうかがえる。49は胴部外面をハケメ調整、口縁部を横ナデ調整したもので、内面には指頭圧痕が残る。一方にのみ三角形の把手がつく。51は底部が穿孔されており、口縁部のみ横ナデ調整を行い、ほかの部分は調整せず成形時の凹凸を残している。小型模造瓶とも考えられる。55はほぼ完形で出土した。杯部内面には3重の螺旋暗文と一段の放射暗文とが施される。杯部外面に渦巻状の墨書がある。同種の渦巻状の墨書きは、52の底部外面にもあり、また、図示しなかったが、SE148出土土器にはほかにも須恵器杯Bの底部外面に記されているものが4点、土師器高杯Aの杯部外面に記されているものが1点ある。さらに、44の底部外面、48の蓋部内面にも墨書きがみられるが判読できない。

SE149出土土器 (fig.34) 土師器皿A (58・59)、土師器小型模造高杯 (57)、須恵器杯A (56)、須恵器楕瓶 (60)、土馬 (61) などがある。57が井戸枠内埋土から出土した以外、図示したものは全て掘形埋土上層から出土したものである。58は口縁部を横ナデ調整、底部外面は

※ 土器の器種名および調査手法は、奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅷ・Ⅹ』に準拠した。

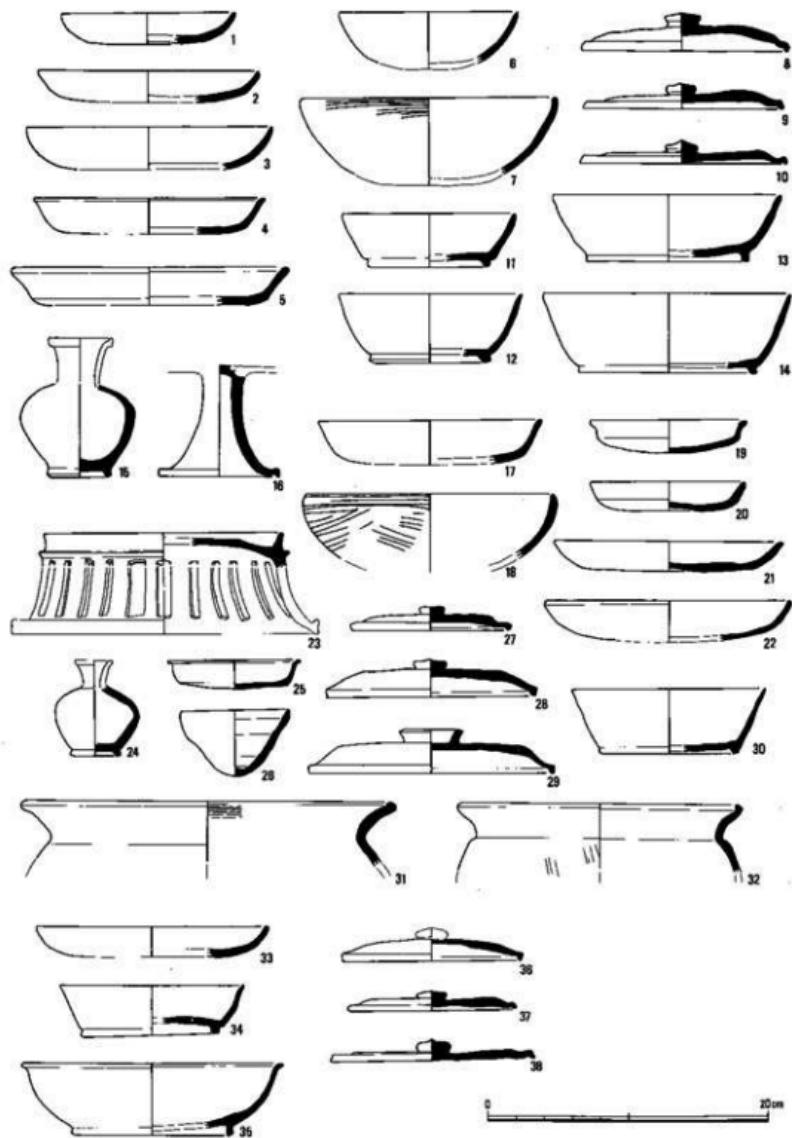


fig. 33 SD023出上上器 (1~16) • SD019出土器 (17~32) • SD021出土上器 (33~38) 1 / 4

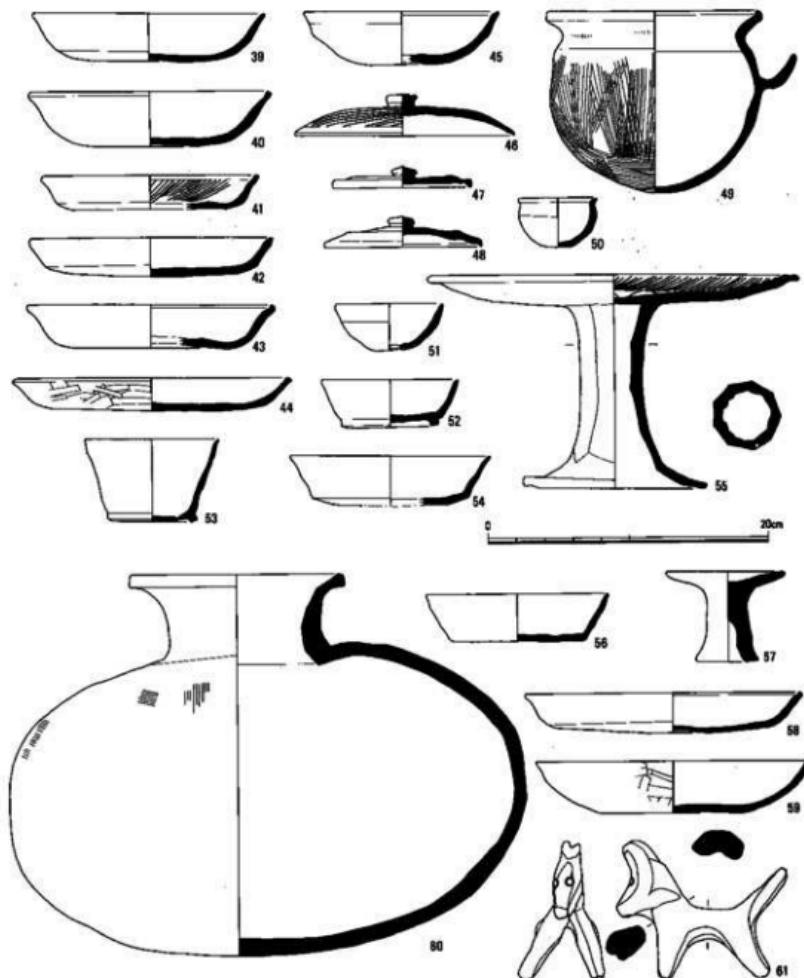


fig. 34 SE148出土土器(39~55)・SE149出土土器(56~61) 1/4

調整を行わない f 手法であり、59は外面を全てヘラケズリする c 手法である。60は内外面ともナデ調整を行って外面の叩き目および内面の同心円圧痕を消去している。また、図示しなかったが、枠内の埋土からは黒色土器A類杯Aの破片も出土しており、これの底部外面には「×」の墨書きがみられる。

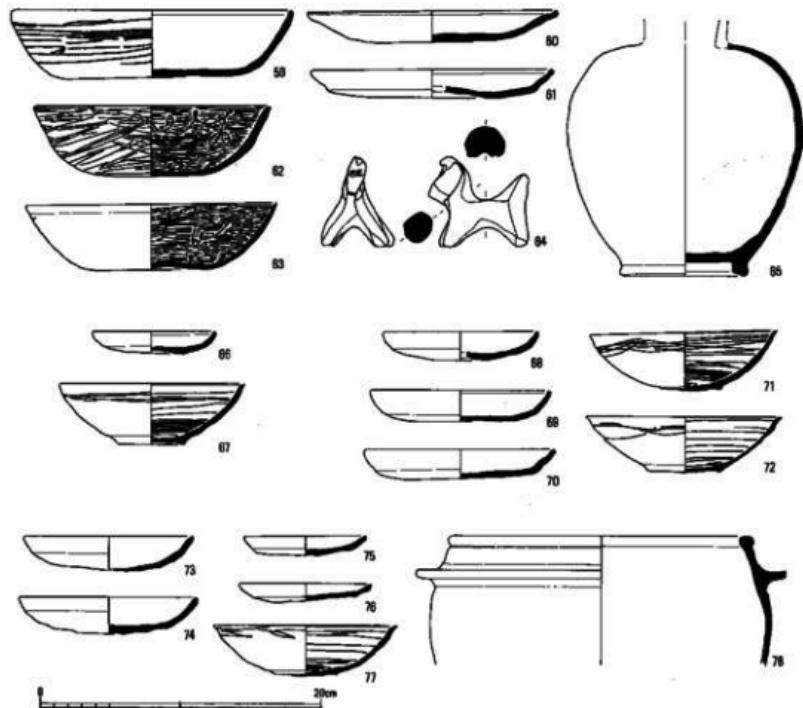


fig. 36 SE150出土土器 (59~65)・SE152出土土器 (66・67)
・SE153出土土器 (68~72)・SK154出土土器 (73~78) 1 / 4

SE150出土土器 (fig.35) 土師器杯A (59)、土師器皿 (60・61)、黒色土器A類杯A (62・63)、須恵器壺 (65)、土馬 (64)などがある。59は外面をヘラケズリしたのち、口縁部のみに粗いヘラミガキを行う。60・61は外面をすべてヘラミガキする^c手法で調整されているが、とくに61は横ナデが強く、削り残す部分が多い。62・63は外面を全体にヘラケズリし、さらに62は密にヘラミガキするが、63は口縁部のみ部分的にヘラミガキする。いずれも内面は密にヘラミガキし、螺旋状の暗文を配する。63の底部外面には「貴」のへら書きがある。65の底部外面には糸切痕が残る。

SE152・153・SK154出土土器 (fig.35) 土師器皿 (66・68~70・73~76)、土師器羽釜 (78)、瓦器椀 (67・71・72・77) が出土している。瓦器椀は、底部内面の暗文が2回転程度の渦巻状のものである。口縁部内面のヘラミガキの間隔があらく、外面のヘラミガキはほとんど省略されている。土師器、瓦器とも時期的には大差なく、13世紀中葉に製作時期が求められる。



fig.36 SE 148 出土土器



fig.37 SE 149 出土土器



fig.38 土馬
(左: SE 149 出土)
(右: SE 150 出土)

3. 木製品

井戸SE148、149、150の枠内から約60点の木製品が出土している。

SE148出土木製品（1～5） 錐形木製品2点、曲物底板4点、有孔丸材、棒状木製品などがある。錐形木製品（1・2）は、ともに平坦な身をもつもので、柄が欠損する。身幅は先端に向ってやや細身となり、端部周縁は半円となる。板目材。曲物底板には2点の完形品がある。3は径15cm、厚さ0.7cmを測り、側面4ヶ所に側板を留めた木針孔がある。他の1点は径18cm、厚さ0.8cmを測り、側面5ヶ所に木針孔がある。ともに柾目板。有孔丸材（4）は長さ8.8cm、径2.7～3.6cmの断面楕円形の丸材で、木口面双方から円錐形の穴が穿たれ、中央で貫通している。側面は縦方向に、木口面は細く丸く削る。棒状木製品（5）は細長い丸材で、両端を直截している。

SE149出土木製品 曲物底板3点、棒状木製品などがある。曲物底板は1点が完形品で、径13.7cm、厚さ0.7cmを測る。側面4ヶ所に木針孔がある。板目材。

SE150出土木製品（6～14） 箸串3点、横櫛3点、箸3点、曲物底板、曲物側板、棒状木製品などがある。箸串（6～8）は薄板の下部を尖らし、上端を主頭状にかたどり、その両側面に4～6条の切り込みを入れたもの。どれも大きさはほぼ同じで、材の表面には、割り裂きの痕跡がある。3点とも板目材。横櫛（9～11）はいずれも破片であるが、平面形は9が長方形、11が半円形に復原できる。歯の数は長さ1cmあたり9が11本、10が10本、11が7本である。箸（12～14）は径0.5cm大のもので両端を欠損する。側面は縦方向に丁寧に削られ、断面は凸形もしくは六角形を呈す。曲物底板、側板はいずれも小片で組合うか否かは不明。

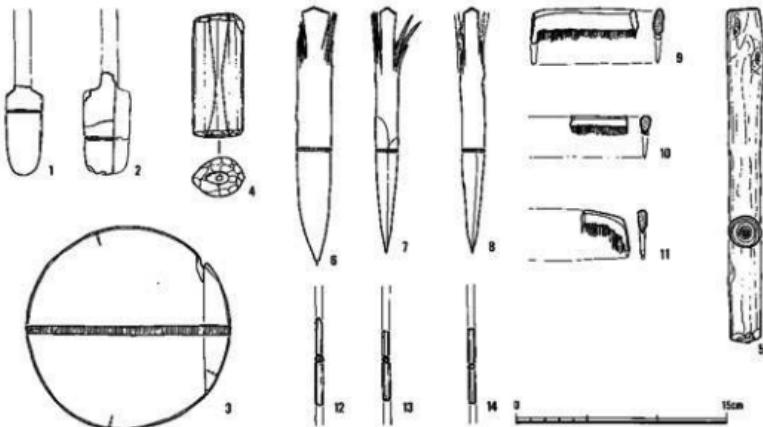


fig.39 木製品 1/4

IV まとめ

本書冒頭でも触れたが、考古学の立場すなわち発掘遺構や出土遺物の側面から市の存在を裏付けることはなかなかに難しい。今回の調査もまた、この点をあらためて痛感せられる結果となつた。と同時に、今後の調査地の選定がますます重要なになってきていることを考えずにはいられない。しかしながら、今回の調査で得られた新知見も少なくはない。とりわけ、道路遺構の確認は平城京条坊の復原研究に新たな資料を加えるものであるし、鎌倉時代の遺構の発見はさらに平城京後のこの地域の歴史を知る上で貴重である。

道路遺構に関する 東西と南北に交差する 2 条の道路は平城京の条坊推定に合致した位置を占める。すなわち、東西道路SF022は左京八条三坊の十一坪と十二坪とを画す小路の相当位置にあり、また南北溝SD023は六坪と十一坪とを画す東三坊間路の東側溝相当位置にある。これらの道路遺構が条坊そのものであるのか、あるいは市の内部を区画する通路であるのかが問題なわけだが、現段階ではいずれともにわかつには断じ難い。ただ、従前の調査で、市域推定地の北辺と東辺には築地跡の存在が明らかだったのに対して、今回は道路際にまで建物や井戸などが迫っている点で様相を異にしている。これは後者に有利な材料ではあるが、いま少し広範に様子をみる必要があろう。

ところで、調査で得られたこれらの遺構の計測座標値をもとに、京の条坊地割について検討しておきたいことがある。それは八条の南北の長さが他の条の南北の長さに比して短いのではないかという問題である。かかる指摘は、かつて遺存地割による平城京の復原研究が行われた際に、1000分の 1 地形図の机上計測結果にもとづいてなされ、朱雀大路において各条の間隔を計測した場合に、四条 531m、五条 532m、六条 533m、七条 543m、八条 518m という数値になることが報告され



番号	地 点 名	X	Y	調査次数
1	八条南間路心	- 148,941,410	- 17,187,000	第 4 次
2	同条間路南側溝心	- 148,937,110	- 17,188,000	第 3 次
3	同条間路南側溝心	- 148,945,740	- 17,263,000	第 1 次
4	同条間路南側溝心	- 148,945,220	- 17,226,000	第 2 次
5	同条間路南側溝心	- 148,944,530	- 17,187,000	第 4 次
6	十一・十二坪地小路心(拵前)	- 148,072,040	- 17,226,000	第 6 次
7	十一・十二坪地小路心(拵後)	- 148,072,700	- 17,226,000	第 6 次
8	同坪地小路北側溝心(SD 022)心	- 148,069,380	- 17,226,000	第 6 次
9	同坪地小路南側溝(SD 021)心	- 148,074,710	- 17,226,000	第 6 次
10	十一・十二坪地小路心	- 148,950,000	- 17,107,600	第 3 次
11	同坪地小路東側溝心	- 148,950,000	- 17,104,260	第 3 次
12	同坪地小路西側溝心	- 148,987,000	- 17,111,440	第 5 次
13	東三坊間路東側溝心	- 148,055,000	- 17,226,330	第 6 次
	東三坊間路心	- 148,941,340	- 17,174,370	第 4 次

tab. 1 条坊等計測座標値一覧

¹⁾ た。七条が長く、逆に八条が短いという結果である。ちなみに、これらの数値を一条の造営計画寸法1800尺で除して単位尺を割り出していくと、四条29.50cm、五条29.5556cm、六条29.6111cm、七条30.1667cm、八条28.7778cmとなる。

さて、今回十一坪南辺の道路を検出したことで、先に確認済みの北辺道路（八条条間路）とあわせて十一坪の南北の長さが確定できることになる。これらの計測座標値をtab. 1に示したが、十一坪南辺道路には先述のように路面に拡幅があるので、拡幅前と拡幅後の双方の計測値を示してある。はじめに拡幅前の数値を使って十一坪の南北の実長を求めよう。その距離は道路心々間で国上方眼を介して130.635mある。しかし、第1・2次調査の結果から、八条条間路南側溝は方眼方位に対してW0°14'05"Sの振れをもつことが判明しているので、この振れを採って修正を加えた値は130.499mである。したがって、この場合に得られる単位尺は、修正値130.499mをひと坪の造営計画寸法450尺で除した値、すなわち28.9998cmとなる。次いで拡幅後の数値で同様の作業をすると、国上方眼を介しての距離131.355m、修正距離131.219m、単位尺29.1598cmという数値が得られる。では、坪の東西の長さについてはどうであろうか。現状では東辺の道路心がわかるだけなので、第4次調査で検出した東堀河が坪の東西長の等分位置にあることを前提に同様の作業をしてみよう。東堀河心は西岸が未検出なので、これに架かる奈良時代後半の橋脚から橋心を求めてみた。すると、東辺道路心から東堀河心までの国上方眼を介しての距離は66.99mであり、修正距離66.654mとなる。これをひと坪の2分の1の計画寸法225尺で除して得られる単位尺は29.6240cmである。

従来の条坊遺構の検討から平城京の造営単位尺は1尺=29.5~29.6cmが適当な値であると考えられている。となると、今回十一坪で算出された南北の単位尺28.9998cmと29.1598cmとはいずれも小さすぎて不適当な数値ということになるわけだが、遺存地割の計測で知られた八条の寸法が短いという結果には合致するのである。これが単位尺の相違に起因するのか、あるいは計画寸法の相違に起因するのかなどといった検討は事後に残るが、実際の検出遺構からかかる知見が得られたことは特筆できる。

鎌倉時代の遺構に関して 平城京東市は、廃都後これを中心に周囲に分散しつつ、少なくとも11世紀初めには「辰市」と称する地方市場への変遷を遂げ、その間16世紀に至るまで経済活動も活発であった。大井重二郎氏がその経緯を家屋壳券や田畠券の文献的研究を通じて克明に考証している。ことに「辰市」を著名ならしめたもののひとつに平安時代末から鎌倉時代にかけての名所詠歌があることはよく知られている。今回こうした時期に符合する建物や井戸などを検出したことは、「多くの民のたつ市」「數知らず行きかふ民の辰の市」（建保三年（1215）・内裏名所百首）と詠まれた中世「辰市」の実態を究明してゆく端緒となるであろう。

1) 岸 俊男「遺存地割・地名による平城京の復原調査」『平城京朱雀大路発掘調査報告』奈良市1974

2) 大井重二郎「平城京の東市より中世の辰市への変遷」『田舎学園女子大学論文集』1988 後に『平城古誌』初音書房1974に再録

平城京東市跡推定地の調査 IV

第6次発掘調査概報

昭和61年3月25日 印刷

昭和61年3月31日 発行

編集・発行 奈良市教育委員会

(奈良市二条大路南1丁目1-1)

印刷 共同精版印刷株式会社

(奈良市三条大路2丁目2-6)

